WIAS Discussion Paper No.2008-003

コンスタンティノープルの奇跡
――総主教アタナシオスに注目して――

Miracles in Constantinople: Regarding the Patriarch Athanasios I

August 27, 2008

橋川裕之/Hiroyuki Hashikawa（早稲田大学）

Waseda Institute for Advanced Study (WIAS)
1-6-1 Nishiwaseda, Shinjuku-ku, Tokyo 169-8050, Japan
Tel: +81-3-5286-2460 ; Fax: +81-3-5286-2470

コンスタンティノープルの奇跡
――総主教アタナシオスに注目して――

抄録

本稿において筆者が注目するのは、ビザンティン教会の一聖人、コンスタンティノープル総主教アタナシオス一世の周辺で発生したとされる奇跡である。アタナシオスは存命中から奇跡を起こす修道士として評判を呼び、死後は、神に祝福された聖人として正式に記念された。本稿では、アタナシオスの奇跡が一三世紀後半から一四世紀前半にかけてのビザンティン帝国の一連の危機を背景に、コンスタンティノープルを中心に伝承されていたこと、また、アタナシオスの生前および死後の政治的上昇にはその奇跡の伝承が無視できない役割を果たしていたことが示される。

Keywords:

総主教アタナシオス、ビザンティン帝国、正教会、奇跡伝承、初期オスマン朝

Patriarch Athanasios I of Constantinople, Byzantine Empire, Orthodox Church, Miracle Tradition, Early Ottomans

Tel.: +81-3-5286-2129

E-mail address: hashikawa@aoni.waseda.jp

はじめに

キリスト教世界における奇跡の起源は、新約聖書のコンテクストに限定すれば、ナザレのイエスその人の行いにある。福音書が伝えるところでは、イエスは多くの病人を癒し、死人を蘇らせ、パンを増やし、突風を静め、湖の上を歩いた。とくにマルコによる福音書はイエスが各地で行った癒しの奇跡の記述を多く収録しており、これはイエスの宣教活動において病人の癒しが大きな位置を占めていたことを示唆する。また、使徒言行録によれば、イエスの死と復活の後には、ペトロを筆頭とする使徒たちが多くの病人を癒し、その奇跡的行いによって多くの信者を獲得した。こうした奇跡は種々の伝承とテクストを通じて、後代のキリスト教徒たちに絶大な影響を及ぼした。すなわち彼らは、神が、かつてイエスとその使徒たちの手を通じて行ったように、彼ら自身の時代においても、奇跡を起こし、彼らにしるしを示すはずと考えたのである。奇跡を起こす力を持つと信じられたのは主として聖人であり、日本語では「聖遺物」と称される彼らの遺体や遺品であった。

古代末期史家のピーター・ブラウンが『西方キリスト教世界の形成』で論じているように、聖人や聖遺物が何らかの奇跡を起こす力を持つという観念は古代末期の地中海世界全域に広まったが、いかなる人物を天と地の仲介者たる聖人とみなすかという点で、東西の間で顕著な相違があった。ラテン語が標準言語であった西方では、聖アウグスティヌスのように、卓越した宗教的指導力を発揮した司教が死後、聖人として崇敬されるのが主流であったが、ギリシャ語が広く使用された東方では、砂漠ないし砂漠に類する過酷な環境で厳格な禁欲生活を送る修道士が、生ける聖人として崇敬される強固な伝統が存在した[1]。本稿では、第四回十字軍後のビザンティン世界に生き、様々な奇跡を起こしたと伝えられる、アタナシオスという名の一聖人に注目し、古代末期以来、西欧世界とは異なる宗教的伝統を育んだビザンティン社会において、実際にいかなる奇跡が生じたと報告され、当時の人々がそれをいかに受容していたのかを考察してみたい。

このアタナシオスなる聖人は今日に至るまで、正教会の典礼で毎年一〇月二八日に記念されているが、正教世界においてもビザンティン学界においても決して著名ではない。聖アタナシオスと聞いて、正教徒や研究者が即座に想起するのは、ギリシャ教父の一人で、四世紀にアレクサンドリア主教を務めたアレクサンドリアのアタナシオス、もしくは、一〇世紀にギリシャ北東のアトス半島にたどり着き、皇帝ニキフォロス・フォーカスの支援を受けて大

[1] P. Brown, *The Rise of Western Christendom: Triumph and Diversity, A.D. 200-1000*, 2nd ed. (Oxford, 2003), 172-6.

ラヴラ修道院を創始した、アトスのアタナシオスであろう。

本稿の注目する聖アタナシオスは、彼がコンスタンティノープル総主教（在位一二八九 - 九三年、一三〇三 - 九年）を務めた事実にちなんで、コンスタンティノープル総主教アタナシオス、あるいはコンスタンティノープルのアタナシオスとも呼ばれている。おそらく知名度では先行する二人のアタナシオスに遠く及ばないものの、彼が歴史的に重要な存在であることは、彼が総主教として教会と社会のラディカルな改革を試みたという事実のみならず、彼が没後、正教聖人として記念されるにいたったという事実とも関係している[2]。

彼の政治は当時の教会人に衝撃をもって受け止められた。というのも、彼は総主教に就任するやいなや、彼が不適切と判断した旧来の慣行を改善しようと欲し、首都に暮らす修道士や聖職者の利益にほとんど配慮しなかったからである。最初に総主教に就任する以前、西方のガノス山からコンスタンティノープルに住まいを移していたアタナシオスは、高徳な修道士として、ときの皇帝アンドロニコス二世パレオロゴス（治世一二八二 - 一三二八年）を含む一部の人々の尊敬を集めていたが、就任後は、自らの生活が脅かされていると感じた教会勢力から強く警戒され、嫌悪される存在となった。彼の登場は同時代の歴史家の執筆意欲をかきたてた側面もある。たとえば、この時代の代表的歴史家であり、大教会（ハギア・ソフィア教会）聖職者として、総主教のアタナシオスを間近で観察する機会に恵まれたゲオルギオス・パヒメリスは、アタナシオスの政治が巻き起こした波紋について、批判的コメントを随所に交えつつ詳細に記している[3]。

アタナシオスは一三〇九年に総主教座を追われた後、おそらくは一三二〇年頃、コンスタンティノープル市内のメガス・ロガリアスティス修道院（後には聖アタナシオス修道院と呼ばれた）でひっそりと息を引き取った[4]。ところが没後ほどなく、彼の遺体の周辺で奇跡が

---

[2] アタナシオスの改革に焦点を当てた研究には、A.-M. M. Talbot, 'The Patriarch Athanasius (1289-93; 1303-09) and the Church', *DOP* 27 (1973), 7-33; J.L. Boojamra, *Church Reform in the Late Byzantine Empire: A study for the Patriarchate of Athanasios of Constantinople* (Thessaloniki, 1982); idem, *The Church and Social Reform: The policies of the Patriarch Athanasios of Constantinople* (New York, 1993); 拙論『コンスタンティノープル総主教アタナシオスと末期ビザンツ帝国の危機』（博士論文、京都大学、二〇〇六年度提出・受理）などがある。

[3] A. Failler, 'La promotion du clerc et du moine à l'épiscopat et au patriarcat', *REB* 59 (2001), 125-46 を参照。パヒメリスの史書の校訂版は、Georges Pachymérès, *Relations historiques,* ed. A. Failler, 5 vols. (Paris, 1984-1999)（以下、*Relations historiques* と略）。

[4] アタナシオスが市内南西、クシロロフォス丘のメガス・ロガリアスティス修道院に居住し始めたのは一二八〇年代半ば頃。同修道院については、V. Kidonopoulos, *Bauten in Konstantinopel 1204-1328* (Wiesbaden, 1994), 16-8 を参照。

生じたと相次いで報告され、結果、彼は弟子の修道士だけでなく、一部の市民からも聖人とみなされるようになった。彼の異例さは、死後に作成されたテクストの量からも確認することができる。二篇の詳細な聖人伝[5]、遺体の移転に際しての演説（ロゴス）[6]、称賛演説（エンコミオン）[7]、典礼用朗読文（アコルティア）などが今日まで伝わっているが、末期ビザンティンの人物でこれほど多くの記念的テクストが書かれたケースはほかにはない[8]。アタナシオスが奇跡を起こす聖人であるという評判は、一四世紀後半までにかなり広まっていたようである。総主教と首都の教会会議は一三五〇年代ないしは六〇年代に、アタナシオスが聖人であると正式に認め、これ以降、彼は毎年、正教会の典礼で記念されるようになった。アタナシオスの聖人認定のしばらく後、総主教フィロテオス・コッキノスは次のように述べている。「神が奇跡を通じて彼［アタナシオス］を称えたとき、教会がまだ正式に彼を認めていなかったので、彼の修道院の修道士らは荘厳な祝典を開催し、正教の主日に彼の聖像を大教会へ持ち込んだ」[9]。彼の死後の評判は、外国の巡礼者をも惹きつけた。一四世紀末、ロシア府主教に随行してコンスタンティノープルを訪れたスモーレンスクのイグナティは、到着の三日目に、聖アタナシオスの修道院まで足を運び、彼の遺体に口づけをしたと記している[10]。

奇跡の発生と伝承

それではアタナシオスの周囲で実際にどのような奇跡が起きたと伝えられているのか確認してみよう。アタナシオスの存命中と死後に生じた奇跡について、聞き取り調査を行った

---

[5] Theoktistos the Stoudite, *Vita Athanasii*, in: *Zapiski- istoriko- filologicheskago fakul'teta Imperatorskago S.-Peterburgskago Universiteta* 76 (1905), 1-51; Joseph Kalothetos, *Vita Athanasii*, in: D.G. Tsames ed., *Ἰωσὴφ Καλοθέτου Συγγράματα* (Thessaloniki, 1988), 453-502.

[6] A.-M. Talbot, *Faith Healing in Late Byzantium: The Posthumous Miracles of the Patriarch Athanasios I of Constantinople by Theoktistos the Stoudite* (Brookline, Mass., 1983)（以下、*Faith Healing* と略）.

[7] R. Fusco, 'L'encomio di Teoctisto Studita per Atanasio I di Constantinopoli (BHG 194a-b)', *RSBN* 34 (1997), 83-153.

[8] アタナシオスの晩年および聖人認定の経緯については、*Faith Healing* の序文に詳しい。R. Macrides, 'Saints and sainthood in the early Palaiologan period', in: S. Hackel ed., *The Byzantine Saint* (London, 1981), 67-87 も参照せよ。

[9] *Faith Healing*, 27; *Tomus Synodicus II contra Prochorum Cydonium*, *PG* 151, 712A-B; J. Darrouzès, *Les Regestes des actes du Patriarcat de Constantinople, vol. 1: Les actes des Patriarches, fasc. 5: Les regestes de 1310 à 1376* (Paris, 1977), no. 2540.

[10] G.P. Majeska, *Russian Travelers to Constantinople in the Fourteenth and Fifteenth Centuries* (Washington, D.C., 1984), 95-7 and 272-3 (commentary s. 21).

うえで、具体的な記述を残しているのは、アタナシオスを記念する一連のテクストの作者であり、晩年の彼の弟子であったと思われるストゥディオスのテオクティストスである。そのテオクティストスによって書かれた聖人伝によれば、奇跡はアタナシオスがコンスタンティノープルに定着する以前、トラキア地方東部のガノス山で弟子の修道士とともに共同生活を送っていた時期に生じている。あるとき、パフラゴニタスの村に暮らすマミという女性が、アタナシオスの弟子の一人に対して投石しようとしたとき、彼女の手は麻痺してしまった。彼女の手の麻痺は、彼女が一年後にアタナシオスの前で自らの罪を告白したとたん、治癒したという[11]。テオクティストスは別の奇跡も伝えている。マミと同じパフラゴニタスの村に暮らすコンスタンティノスという名の司祭は、アタナシオスらが食料を欠いていることを知り、ミツバチの巣を彼らに送り届けた。アタナシオスがコンスタンティノスの親切に感謝し、彼に神の報いがあるよう祈りを捧げたところ、それから七日間、コンスタンティノスとその家族が食べたものはすべて、蜂蜜よりも甘かったという[12]。

米国のビザンティニストであり、アタナシオスの専門家でもあるアリス・メアリー・タルボットは、以上の奇跡に関連して、ガノスにいたアタナシオスの弟子がテオクティストスへの直接の情報提供者であったことを推測しているが[13]、聖人伝の別の箇所で、テオクティストスがアタナシオスのガノスでの生活について、当時の弟子のエウティミオスとペリブレプトス修道院の修道士ヨシフに取材したと明かしていることから、この奇跡はエウティミオスもしくはヨシフからテオクティストスに語られたのであろう[14]。ここで重要なのは、奇跡の生じた時期である。アタナシオスがガノス山に定着したのは、アンドロニコスの父、皇帝ミハイル八世（治世一二五九 - 八二年）がローマ教皇の首位権などを認めた教会合同を帝国社会に強制していた時期にあたる。アタナシオスは合同反対派に対する皇帝の迫害を避ける形で何度か居住地を変え、最終的に、郷里アドリアノープルからそう遠くないガノス山で弟子たちと暮らし始めた。アタナシオスが近隣の住民から合同反対派の修道士と目されたことは間違いなく、聖人伝によれば、実際、彼は在地の主教の密告によって逮捕され、首都の牢獄でしばらく拘禁されている[15]。こうした背景をふまえると、二つの奇跡は、正教信仰の不屈

---

[11] Theoktistos the Stoudite, *Vita Athanasii*, 19-20.
[12] Ibid., 20-1.
[13] A.-M. Talbot, 'Fact and Fiction in the Vita of the Patriarch Athanasios I by Theoktistos the Stoudite', in: *Les vies des saints à Byzance: Genre littéraire ou biographie historique?* (Paris, 2004), 87-101, at 95.
[14] Theoktistos the Stoudite, *Vita Athanasii*, 13 and 18.
[15] Ibid., 17-8. リヨン教会合同時代のアタナシオスの生活については、拙稿「ビザンツの隠

の支持者であるアタナシオスと、ローマ教皇権威への服従を余儀なくされた社会の間の緊張を表していることがわかる。世俗社会から孤立し、飢えに面したアタナシオスらにミツバチの巣を届けた司祭コンスタンティノスは、自らの危険を顧みることなく正教信仰を支持し、アタナシオスの弟子に石を投じようとした婦人マミは、正教信仰への邪悪な迫害に加担した。アタナシオスを尊敬する人々から見て、二つの奇跡は、コンスタンティノスにとっては神の祝福として、マミにとっては神の罰として生じたのである。

きわめて興味深いことに、ガノス山のアタナシオスが起こしたとされる二つの奇跡のうち、司祭コンスタンティノスがその家族と一緒に経験したものは、ゲオルギオス・パヒメリスもその史書で言及している。一二八九年夏、三人の総主教候補者の中からアタナシオスが指名された後、コンスタンティノープルの住民の間では、彼の総主教としての適性や人となりが大きな話題となった。「人々は次のように語りもした。ある人がミツバチの巣を彼［アタナシオス］に送り届けたとき、彼はそれを食し、そののどは甘みに満たされた、彼が送り手に甘みが伝わるよう祈ったところ、その瞬間から何日もの間、送り手その人の口の中にこの甘みがあったのだ、と」[16]。パヒメリスは奇跡の起きた場所もミツバチの巣の送り手の名も明かさないが、彼が、テオクティストスの伝える、司祭コンスタンティノスの味覚に生じた奇跡に言及していることは明らかである。ここでパヒメリスがテオクティストスと情報を共有しているのはなぜかという問題が生じるが、起源を同じくする伝承に両者が異なる経路で接した可能性がもっとも高い[17]。テオクティストスの記述のほうがパヒメリスのそれよりも詳しいのは、前者がガノス滞在時のアタナシオスを知る修道士に直接取材したためであろう。

パヒメリスが独自の情報源を持っていたことは、彼がテオクティストスの聖人伝には含まれていない奇跡にふれている事実からも示唆される。その奇跡は、あるとき畑で野菜を収穫していたアタナシオスが、出くわした狼をその場で手なずけ、荷物を修道院まで運ばせた、

修士とリヨン教会合同」『西洋史学』二〇六号（二〇〇二年）、二四‐四六頁と「総主教アタナシオスの遍歴時代――一三世紀ビザンツにおける修道士と聖山」『オリエント』四九巻二号（二〇〇六年）、一四七‐一六四頁を参照。

16 *Relations historiques*, VIII, 161.

17 パヒメリスが史書を執筆したのはおそらく一三〇〇年代である。一方、テオクティストスが一連のアタナシオス関係テクストを執筆したのは、一三二〇年代ないし一三三〇年代である。テオクティストスがパヒメリスの史書を参照した証拠はない。彼が参照したのが確実なのは、アタナシオスの書簡写本のほうである。したがって、テオクティストスは、ガノス山のアタナシオスに関連する二つの奇跡伝承に、パヒメリスの史書以外の情報源によって触れたことになる。アタナシオスの書簡写本をめぐる諸問題については、拙稿「コンスタンティノープルを遠く離れて――総主教アタナシオスの初期の書間写本と近年の研究を概観する」『地中海研究所紀要』六号（二〇〇八年）、一〇九‐一二四頁を参照。

というものである[18]。城壁と海で囲まれたコンスタンティノープルに狼が出没していたとは考えにくく、この奇跡の舞台はガノス山、あるいはガリシオンやアトスなど、アタナシオスが以前暮らした別の山岳であろう。少なくとも確実にいえるのは、皇帝アンドロニコスの治世初期、アタナシオスがガノスからコンスタンティノープルへ、その奇跡の伝承とともに移動したこと、そしてアタナシオスが総主教位に就くことが決定したことで、奇跡の伝承がより広範に流布し、首都市内で聖職者として暮らすパヒメリスの耳にも入ったことである。

この時点ですでに、アタナシオスは論争を呼ぶ存在であった。ある人々は、彼が起こしたとされる奇跡を話題にし、彼の並外れた徳性を強調し、別の人々は、アタナシオスの性格は厳格に過ぎるとして、その総主教としての資質に疑問を呈した[19]。パヒメリスはこのアタナシオスに批判的な人々の代表的存在といってよい。パヒメリスの奇跡への言及の仕方はテオクティストスのそれとはまったく異なっており、彼は紹介する二つの奇跡の真正性をはっきりと疑っている。ミツバチの巣にまつわる奇跡については、単に贈り物をした人の願望が口の中で蜂蜜の役割を果たしただけ、狼の奇跡については、実際には人であったのが狼として誤って伝えられただけ、というのが彼の説明である[20]。おそらく現代の読者の大半はパヒメリスの懐疑的見解を支持するであろうが、ここでは、その説明の方法よりむしろ、パヒメリスがアタナシオスの奇跡とされるものにあえて言及し、否定を試みていることのほうが重要である。というのもそれは、当時のアタナシオスの宗教的権威が、修道士としての徳性だけでなく、奇跡の伝承によっても支持されていたことを示唆するからである。名うての教養人であったパヒメリス自身は決して認めようとはしなかったが、コンスタンティノープルの一部の人々は、同地で暮らし始めたアタナシオスを、奇跡的な力を有する生ける聖人とみなし、熱烈な崇敬を捧げていたのである[21]。

死後の奇跡

アタナシオスの奇跡を起こす人としての評判は、その死後にいっそう高まったと考えられ

---

18 *Relations historiques*, VIII, 161.
19 *Relations historiques*, VIII, 161-3.
20 *Relations historiques*, VIII, 161.
21 首都の政治エリート層で最初にアタナシオスに関心を寄せたのは、メガス・ドゥルンガリオスで宦官のアンドロニコス・ヨノポリティスである。ヨノポリティスはアタナシオスを皇帝の弟コンスタンティノスに紹介した後、皇帝アンドロニコスその人に引き合わせた。この面会の後、皇帝はアタナシオスにメガス・ロガリアスティス修道院を居住地として与えている。*Relations historiques*, VII, 123.

る。その契機となったのは、彼の遺体が弟子の修道士たちに示した聖なるしるしである。テオクティストスの演説テクストによれば、アタナシオスの遺体は修道院の敷地に三年間埋葬されていたにもかかわらず、遺骨の移転のために掘り出されたとき、腐敗していなかったという[22]。ビザンティン世界において、遺体が生前の肌色を留めたまま腐敗しないことは聖人であることの証しとみなされていた。したがって、アタナシオスの遺体を掘り出した弟子たちは彼を聖人と崇め、遺体を棺に納めたうえで、修道院の聖堂内に安置した。このアタナシオスの遺体および遺物が多くの奇跡を起こしたことから、テオクティストスは関係者に事情を尋ね、奇跡報告集のようなテクストを作成したのである。

アタナシオスの聖遺物はとりわけ深刻な病を患う人々にその威力を発揮した。テオクティストスのテクストには、現代人にも通じるような悩みを抱えた人々が描かれている。たとえば、小アジアの村からやって来たテオドロスという名の司祭は、コレラのような謎の熱病を一年近く患い、甚大なる苦しみにあえいでいた。大枚をはたいて何人もの医者に診てもらうものの、彼の病は一向に去らなかった。医者たちは残酷であり、当初は彼に甘い言葉をささやくのであった。「もう心配することはありません。病はまもなく過ぎ去り、あなたは完全な健康を取り戻すでしょう」、と。しかし彼らは、患者が高額の治療費を払い続けることができないと見ると手のひらを返した。「あなたの病は治療不可能です。あなたの苦しみは人間の技術よりも大きなものです。治療できるのは、「不可能なことが可能な」神しかいません」。病に苦しみ続け、財産まで無くしたテオドロスが最後にすがりついたのはアタナシオスであった。彼は友人から助言を受け、アタナシオスの衣装の切れ端を手に入れ、それを燃やして煙を大きく吸い込み、アタナシオスの名を唱えた。そうすると効果は瞬時に現れた。彼の病は突然、何の痕跡も留めることなく消失したのである[23]。パヒメリスが仮に生きていれば、彼はきっとこの奇跡に対しても、何か別の合理的説明を持ち出してきたであろう。幸か不幸か、彼はアタナシオスよりも早く、一三一〇年頃に没したため、その死後の奇跡を耳にすることはなかった。

アタナシオスの死後に生じた治癒の奇跡を真実であったか、虚偽であったかと問うことは、ここではさほど重要ではない。重要であるのはむしろ、アタナシオスの周囲で一部の人々が奇跡とみなす現象がなぜ生じたのか、何が彼らに奇跡の発生を積極的に信じさせたのか、を問うことである。常識的な見解ではあるけれども、人々が奇跡を強く求めるのは、彼らに過

[22] *Faith Healing*, 56-60.
[23] *Faith Healing*, 82-4.

酷な運命が襲い掛かったとき、彼らが自らの意志と力では克服できない危機的状況に陥ったときである。アタナシオスの奇跡についてみれば、一三世紀から一四世紀にかけてビザンティン帝国が経験した全般的危機が背景にあったことは明らかである。小アジア西部では一三〇〇年頃からトルコ人勢力が急速に台頭し、ビザンティンの都市や村落は、彼らの熾烈な攻撃の対象となっていた。先に紹介した司祭テオドロスは小アジアの村落出身と伝えられているので、難民であった可能性がある。

テオクティストスのテクストの中には、小アジア住民の苦境と直接関係する奇跡も含まれている。後にオスマン帝国の首都となるプルサ（ブルサ）に暮らしていたカティニジナという女性は邪悪な霊にとりつかれ、暴言や意味不明な言葉を発したり、犬のようにうなり声をあげたり、突如笑い出したり泣き出したりと、一三年にわたってきわめて不安定な精神状況にあった。その彼女が暮らす都市プルサが一三二六年、オスマンの息子オルハンによって攻略された後、彼女は奇怪な捕虜として、オルハンの前に連れ出された[24]。悪霊は彼女の口を通じて、オルハンに対しても暴言を浴びせたが、オルハンは彼女に唾を吐く以上のことはしなかった。こうして解放されたカティニジナはコンスタンティノープルに避難し、悪霊の憑依に由来する病を早急に癒すべく、市内のあちこちの聖域を訪れた。最終的に彼女の病が治癒したのがアタナシオスの修道院であったことから、彼女は同院の修道女となり、自らを癒した人の名にちなんでアタナシアの新名を名乗った[25]。テオクティストスは、彼自身を含む首都のほとんどすべての人が彼女を知っていたと述べており、これが事実であるとするなら、彼女の奇行は首都でもしばらく続き、人々から好奇の目で見られていたのであろう。

アタナシオスの力はカティニジナを越えて、その夫にも及んだ。プルサで捕虜となり、拘禁されていた彼は、ある日、その妻がアタナシオスによって癒され、修道女となったことを耳にした。カテニジナと同じように彼がアタナシオスに祈りを捧げたところ、アタナシオスは彼の夢の中に現れた。そして驚く男に対して、今いる牢獄をただちに脱出し、首都のアタナシオスの修道院を目指すよう告げた。海辺には利用できる小舟があり、途中、いかなる障害にも出会わないと夢の聖人は付け加えた。男は目を覚ますと、「聖なるアタナシオス様、私をお助けください」と口にして十字を切り、牢獄を抜け出した。夜を徹してひたすら注意深く行動した彼は、小舟に乗って海峡を横断し、無事、コンスタンティノープルに達するこ

---

24 テオクティストスはオルハンの固有名詞に言及していない。しかし、彼が用いている「アミル」（エミールに相当）の語がオスマンの子、オルハンを指しているのは明らかである。実際、プルサを攻略したのはオルハンである。*Faith Healing*, 116.

25 *Faith Healing*, 114-8.

とができた。夢のお告げどおりアタナシオスの修道院に来ると、彼はその棺の前で大粒の涙を流し、それまでの経緯を修道士たちに物語った。自らを救ったアタナシオスに対し、その身のほかには何も捧げるものを持たなかった彼は、妻と同じく、同院の修道士となって生きることを選んだ[26]。

おわりに

テオクティストスが演説テクストの中で最後に紹介するプルサの夫婦の物語は、実際の小アジアの破局的状況を知っていた人々には、とりわけ大きな感動を与えたであろうし、テオクティストス自身もそれに強い感銘を受けたのであろう。残念ながら、テオクティストスの演説がどの程度の聴衆と読者を持っていたのかは定かではないが、小アジアの危機が、同地の一部の住民に示された奇跡を通じて、さらにはそれを記録したテオクティストスのテクストを通じて、コンスタンティノープルでのアタナシオス崇敬を促進したことは疑いない[27]。

他方ですでにふれたとおり、帝国西方からの脅威も東方からの脅威と同様、無視できない歴史的背景である。それは、総主教に就任する以前に生じたとされるアタナシオスの奇跡の社会的背景でもあり、彼がコンスタンティノープルに定着して総主教に選出される政治的背景でもある。ビザンティン帝国にとっての西方勢力、ローマ教皇の霊的権威に服するラテン人の脅威は、第四回十字軍によって成立したラテン帝国が崩壊した後も続いていた。たとえばよく知られているように、フランス国王ルイ九世の弟、シャルル・ダンジューはビザンティンのキリスト教徒を異端者とみなしたうえで、ラテン帝国を復活させるべく、東方への再遠征を目論んでいた。皇帝ミハイルは彼らの野望から帝国を守るために、教会合同政策を追求したのである。これに対して、国内の一部の教会人や修道士はラテン人を完全なる異端者と位置づけ、皇帝の望む合同は信仰と魂を危険にさらすと説いた[28]。このときアタナシオスは声高に合同に抵抗するのではなく、政治を遠ざけて山岳での修道生活に専念することを選び、それによって自らの信仰と魂の純潔を守ろうとした。彼のこうした態度は、合同の強制

---

26 *Faith Healing*, 118-20.

27 アタナシオスの聖遺物が広く崇敬されていたことは、反パラマス派の修道士グリゴリオス・アキンディノスもその著作の中で証言している。 Cf. J. Nadal Cañellas, 'Un fait inconnu de la vie du Patriarche Athanase I de Constantinople', in: A. Schoors and P. van Deun eds., *Philohistor : Miscellanea in honorem Caroli Laga septuagenarii* (Leuven, 1994), 443-9.

28 拙稿「魂を脅かす平和――ビザンツの正教信仰とリヨン教会合同」『洛北史学』一〇号（二〇〇八年）、一－二八頁を参照。

に心を痛める近隣の住民たちに、彼への畏敬の念を抱かせたはずであるし、彼らに、神がアタナシオスを通じて奇跡を起こすことを期待させたはずである。彼らはアタナシオスの一挙手一投足に注目し、非日常的な出来事を待ち望んでいたのである。

パヒメリスの史書からも確認できるように、アタナシオスがかつて起こしたとされる奇跡は、やがて首都社会でも話題になった。皇帝アンドロニコスがミハイルの死後、教会合同を即座に放棄したことで、コンスタンティノープルの住民たちは、正教信仰を体現する高徳な人物と神の祝福を明示するような出来事を熱烈に求めていたと思われる。コンスタンティノープルは「神の母」マリアの守護する聖なる都市であると一般に信じられていたため、彼らのそうした願望は、帝国の他のいかなる地域にもまして強かったであろう[29]。困難な時代にあって、正教信仰を護持しただけでなく、奇跡を起こしたという彼の名声は、彼をコンスタンティノープル総主教の地位へ押し上げる力を持っていた。彼の死後の活躍も、生前の奇跡の伝承がなければあれほど多様なテクストが書かれなかったと思われる点で、その当初の名声に由来している。アタナシオスは東西教会の修復困難な亀裂とビザンティン帝国の深まる危機が作り出した、苦境にあえぐ正教徒のための聖人であったといえよう。

[29] Cf. B.V. Pentcheva, *Icons and Power: The Mother of God in Byzantium* (University Park, PA, 2006).